

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(11) ヘレン・ケラー

- ・生後 19 か月で病気のために目と耳の機能を失い、暗黒と沈黙の生涯が始まることとなった。耳が聞こえないため、ことばを話すこともできず、こうして盲・聾・啞という三重の障害によって世界から隔離されたまま、人間にとってもっとも重要といわれている時期を過ごすことになった。
- ・ヘレンが7歳のときからすべてを教えたアン・サリバン先生は、5歳の時に眼病のために視力を失い、そのうえ恵まれない家庭環境のために救貧院で4年間も過ごすという悲惨な体験の持ち主である。手術によって視力は回復したものの生涯、失明の不安と闘いながら21歳のときにヘレンの教師となり、約50年にわたってヘレンと過ごした。
- ・サリバン先生は、普通の子どもはどのようにしてことばを覚えるだろうかと考え、母親が赤ん坊に話しかけるようにたえずヘレンの手に指でことばを綴るという方法を通して話しかけ、ヘレンもこれに同じように、指話によってこたえた。
- ・ヘレンが発声法と読唇法を習得するのは30歳になってからのことで、それまでは、掌と指先が唯一のコミュニケーションの手段だった。
- ・ヘレンは盲人として大学を卒業した世界最初の人物である。教室にはいつもサリバン先生が付き添い、講義を指話によってヘレンに伝え、家に帰ってからその内容を点字で書き記し、点字で読めない本(大部分はそうだったが)は、すべてサリバン先生の目と指を経由してヘレンの頭脳に届けられる。このようにして、大学教育の全課程を修得したのである。
- ・ヘレンの指は、1分間に約80語の速度で文字を記すことができたというが、これは、熟練のタイピストとほぼ同じ速度である。おそらく、サリバン先生も同じ位の速度で指話したものと思われるが、これは、晴眼者が本を読む速度と比較にならないほど速いことは、いうまでもない。
- ・すべてのものに名前があることを知ったヘレンは旺盛な学習意欲を発揮し、次から次へとことばを覚えていった。サリバン先生はヘレンが覚えたことばの数を克明に記録しているが、はじめの3か月で400の単語を修得したという。障害を持たない子供がことばをおぼえる速度に比べ、はるかにハイペース、いかに学習意欲が高かったかを物語っている。
- ・それと同時に、学習意欲にいつそう拍車をかけたのが、盲目であるが故にもちえた「集中力」である。
- ・ヘレンは、たえず耳や目に飛び込んでくる雑多な情報に煩わされることなく、学習に、つまり、ことばの世界に没頭する。
- ・「目覚めている間は一分一秒も惜しんで知識欲を満足させようと精神がたえまなく活動していた」とサリバン先生は記した。
- ・ヘレンも「一生涯をただ一日に縮めて生きる小さな昆虫のように私の生活は忙しかった」と記している。生活イコール学習であり、目覚めているすべての時間が勉強の時間であった。

- ・「何でも強く欲しいと思えば、かならずどうにかして得られると信じていました」
- ・「盲人がつくったものだからといって役に立たないつまらないものを買うということは、少しもよいことでなく、結局において、盲人のためにならないことであります」
- ・「身の不自由がいかにほどのものかを私よりよく知る者はいない」 極限状況に置かれた自己を意識することによってこそ、記憶力ばかりでなく人間のもろもろの能力は高まる」
- ・ヘレンは「写真のような完全な記憶力」があった。「記憶されたものを取り出す能力」があった。「連想力」「検索能力」があった。
- ・「そもそも偉人とは、あらゆる芸術や科学、知ることのできるすべてのものを、自分の食物として、内部に取り入れる強力な同化力の持ち主にほかならない。本当の独創家だけが、他人から借りる術を心得ているのである。どのような書物も、所詮、引用にすぎず、どのような家も、あらゆる森と鉱山と石切場からの引用であり、どのような人間も、その祖先からの引用にすぎない」(エマソン著「代表的人間像」の冒頭のことば)
- ・ヘレンは「自分の文章」を書くことにより、アイデンティティをつくりあげた。アイデンティティとは自分の文章を書けるということ。
- ・「元々、人間のもつ知識の大部分は創造力によって構成されたもの」である。
- ・〈ナイアガラ瀑布〉
「アメリカ滝が落下している断崖の上に立って、空気が震動し、大地が動揺するのを感じたときの激しい感動を私は文字に書きあらわすすべを知らない」
- ・「宇宙の無限・脅威は、それを受け取る能力に比例して私たちに啓示される」
- ・まだ葉をつけていない木の枝のにおいでそれが何の木かいいあてることができた。
- ・「かりに 3 日間だけ視力が与えられたら、それをどう使いたいか。明日は視力がなくなるかも知れないという気持ちであなたがたの目を有効にお使いください」(「三日間の視力」というエッセイより)